

UAE・イスラエル国交正常化で現れた 中東の地殻変動を理解するために



【評者】

日本エネルギー経済研究所
中東研究センター主任研究員

近藤重人

二〇二〇年八月のアラブ首長国連邦(UAE)・イスラエルの国交正常化に関する発表は、形骸化してきたとはいえ、中東政治を長く規定してきたアラブ・イスラエル対立の歴史に大きな変

更をもたらすものであった。その背景には、イランの脅威の増大、米国の中東地域への軍事的関与の低下、イスラエルの相対的な安全保障・経済上の魅力の向上、アラブの指導者の世代交代

とパレスチナ問題の重要度の低下など、さまざまな要因が関係していた。この問題を探る上で、もつとも直接的な手掛かりを与えてくれるのは①である。これは英国とイスラエルの第一

① *Fraternal Enemies : Israel and the Gulf Monarchies*

Clive Jones & Yoel Guzansky・著
Oxford University Press, 2019

② 世界を動かすイスラエル

澤畑剛・著
NHK出版新書、2020年

③ 蜂起(インティファダ)

占領下のパレスチナ 1967-1993
鈴木啓之・著
東京大学出版会、2020年

④ 米国とイランはなぜ戦うのか？

菅原出・著
並木書房、2020年

⑤ *MBS: The Rise to Power of Mohammed bin Salman*

Ben Hubbard・著
Tim Duggan Books, 2020

線の研究者によるイスラエル・湾岸諸国関係史の決定版とも言えるものであり、湾岸諸国各国がどのような対イスラエル関係を持ってきたかを詳述している。両者の関係は一九九〇年代の中東和平プロセスの進展時に始まり、その後二〇〇〇年代に希薄化するが、一〇年代に再び接触を増やした過程を、国別に描いている。

イスラエル側の視点から最近の中東情勢を論じたのが②である。イスラエルのハイテク産業が湾岸諸国だけではなく日本をも惹きつけているとした第一章は読み応えがあり、また著者の取材に基づいた興味深いエピソードも豊富に交え、読者を飽きさせない。イスラエルを中心としつつ、アラビア語を習得した著者のバランス感覚も随所に感じられ、最近の中東情勢を把握する上で、まず手にするのに最適な一冊と言えよう。

他方、アラブ諸国から取り残され孤立状況が深まったパレスチナであるが、その国家形成に向けた政治運動の原点を追究した手堅い学術書が③である。これは一九八七年の第一次インティファダの発生が偶発的なものではなく、さまざまな内的な動きや他国との関わり合いの中で、比較的長期にわたって準備されたものであったことを、史実に基づき明らかにした。学術書ながら文体も読みやすく、時代に引き込まれる魅力がある。

そして、現在でこそやや小康状態となったが、昨年から今年初めにかけて深刻に懸念された米・イラン間の衝突について、危機管理の専門家としての視点を交えつつまとめたのが④である。米・イラン関係は最近でも対立構図は変わっておらず、一月の大統領選でトランプが再選された場合には、再び緊張が高まる可能性がある。他方、

バイデンが当選した場合には、イラン核合意が見直される可能性もあるが、その場合には本書を通じて、同合意が国際社会でどのように評価あるいは批判されたものであったのかを確認しておくことが有用となる。

最後に、こうした中東情勢の変動の中で、今後変化の要として注目されるのがサウジアラビアであり、その次期国王に内定しているムハンマド皇太子、通称「MBS」についてまとめたのが⑤である。王族らの拘束、在トルコ総領事館での記者殺害事件など、同皇太子が関わったとされる出来事に関して、米国のジャーナリストが豊富な逸話をもとに詳述している。ムハンマド皇太子はUAEのムハンマド・アブダビ皇太子と近い関係にあり、今後彼が全権を掌握すれば、イスラエルとの関係についてもUAEの後に続く可能性もあるだろう。●

AI、SNS、宇宙、ミサイル—— 技術革新は安全保障をどう変えるか

【評者】

横浜国立大学特任准教授

齊藤孝祐



① 無人の兵団

——AI、ロボット、自律型兵器と未来の戦争

ポール・シャーレ・著
早川書房、2019年

② 「いいね！」戦争

——兵器化するソーシャルメディア

P・W・シンガー、エマーソン・T・ブルッキング・著
NHK出版、2019年

③ 新たなミサイル軍拡競争と日本の防衛

——INF条約後の安全保障

森本敏、高橋杉雄・編著
並木書房、2020年

④ 宇宙と安全保障

——軍事利用の潮流とガバナンスの模索

福島康仁・著
千倉書房、2020年

⑤ 武器貿易条約

——人間・国家主権・武器移転規制

榎本珠良・著
晃洋書房、2020年

科学技術は安全保障のあり方を規定する。このことは古くから指摘されているが、今日ほどその影響の仕方が多様化し、かつ、大きく変わりつつある時代はないのかもしれない。

①は、人工知能（AI）がもたらす兵器の自律化問題に着目し、それがいかにして安全保障に影響を及ぼすのかを論じた大著である。AIはしばしば国際政治における「ゲームチェン

ジャー」の代表例として取り上げられる。著者は、自律型兵器、すなわち人間の指示を介さず、AI自らの判断で標的を選び攻撃を行う兵器をめぐる現在の動向や議論を丹念に追いつながら

将来的に自律化の進展がもたらしうる法律や道徳、あるいは軍事戦略上の諸問題に言及していくことで、自律型兵器をめぐる国家の安全保障政策や国際的なルール作り、さらには未知の技術に対する人の向き合い方までも含めた問題提起を行う。

これに対して②は、必ずしも先端的な技術でなくとも（あるいは「枯れた」技術であるからこそ）、その普及や利用のあり方が変化することで、新たな安全保障上の問題が提起されていくことを示す著作、という位置づけとなる。インターネットの爆発的な普及は民主化の促進や人々の豊かさを生み出す一方、ソーシャルメディアを通じた情報操作や影響力行使の問題が高まることで、安全保障の観点からは情報技術の拡散が進むほどにその管理が求められるようになるのである。

次に、より国際政治学的視座から、

技術の発展・拡散が安全保障に与える影響を論じた近著を紹介したい。

③は、近年でも衝撃的な出来事のひとつとなった中距離核戦力全廃条約（INF条約）の失効問題に焦点を当て、ポストINF条約時代の安全保障問題に向き合った共著である。INF条約が締結された冷戦末期と異なり、特に二〇〇〇年代以降にはミサイル関連技術の発展や分布の変化、さらには中国の台頭なども手伝って、当初想定されていた抑止の条件は大きく崩れてきた。その経緯と帰結を学術的かつ多面的に論じるだけでなく、「その中で日本はどうするのか」という政策的な問題意識が一貫して打ち出されている点も、同著の特徴である。

他方、技術の発展が国家間の対立だけでなく、協力の動機を形成している側面もあることは、見落としてはならないだろう。④が「スペースパワー

論」の視角から克明に描き出すように、宇宙の軍事利用は冷戦期から続く懸案事項である一方、宇宙技術の発展に伴うアクセスや関与アクターの増加もあいまって、宇宙利用の安定化を目指したガバナンスを追求しようという動きも同時に高まっている。

最後に、⑤は、著者自身もNGOの立場から条約交渉の過程に向き合ってきた経験を交えつつ、一九世紀から武器貿易条約（ATT）の成立に至るまでの言説形成過程を追った手堅い学術書である。批判的安全保障研究の視座から、人間像のあり方と国家主権の問題を手がかりに武器移転規制の問題に取り組む同書は、軍事技術や武器の管理が大国間競争の文脈で問題になるだけではなく、しばしば南北問題の様相を呈してきたことを思い起こす重要なきっかけを与えてくれるものとなっている。●